

「#突撃！農女ライタープロジェクト」ソバノミモメン

～中河内で経験した仲間と農業をする楽しさを皆さんに～

●第3弾

皆さんこんにちは！ 私は、近畿大学経営学部松本ゼミの農業プロジェクトに参加している学生です。日本の農業就業人口が減少している中、若者に少しでも農業に興味を持ってもらえるために、日々活動を行っています。私が実際に農作業を体験し、それを生業とされている方々からお話を伺い、そこで得た情報や経験を踏まえて綴らせていただきました。この記事を読んで、少しでも農業に興味を持っていただければ幸いです。



農業体験を行った神立農地

今回お邪魔させていただいたのは、大阪府八尾市にある「高安農空間づくり協議会」の神立農地です。そこでは、遊休化し荒廃している農地を再生・活用し、農作物のブランド化・地域の活性化を目指した取り組みをされています。作業としては、遊休農地で栽培したそばの実収穫と木綿の植え替え準備を行いました！

コロナ対策として、できる限りソーシャルディスタンスを保ち、マスクを着用しています。

●実際に体験した農作業

①そばの実収穫

私が先ず行った作業は、そばの実の収穫です。「そば」とは、我々が普段啜って食べているあの「蕎麦」です。皆さんは、蕎麦が「そばの実」から作られていることをご存知だったでしょうか。もしかしたら、初めて知ったという方もいらっしゃるかもしれません。蕎麦は、室町時代に売り上げに悩んでいたうどん屋が考案した食べ物で、当時は啜る麺状の蕎麦ではなく、蕎麦粉をお湯でこねて作った団子状の「蕎麦掻き」が一般的に食べられていました。それがお客さんから評判が良く、最終的に私たちが普段食べる蕎麦へと変化を遂げました。そばは栄養価が高く、生活習慣病の予防や美肌効果など様々な効果が期待されています。そんな体に良いとされる蕎麦をどのように収穫していくのか非常にわくわくしていました。最初に乾燥させた蕎麦の束を叩き、そばの実を落としていきます。そして、落としたそばの実を「山本式唐箕(とうみ)」という手動の機械に流して細分化していきます。この作業を繰り返し、最終的にそばの実だけが抽出されます。収穫できたそばの実は袋が破ける程重たく、この量で30人前の蕎麦ができるそうです。

ここで、「高安農空間づくり協議会」の会長である山中さんにお話を伺いました。

Q. 蕎麦を作り始めたきっかけは何ですか。

A. 中河内地域は砂地が多く、この後に紹介する木綿の栽培と同時に砂地に適している蕎麦も栽培できるのではないかという試みで始めたそうです。

Q. コロナの影響で何か変わりましたか。

A. 農業など第1次産業には影響はなかったものの、飲食業界が打撃を受けているため栽培した農作物の販路が縮小してしまいました。また、毎年開催されている「JA まつり」がコロナの影響で中止となったため、ドライフラワーや観賞用コーンが販売できなくなってしまったそうです。

私がお話を伺って感じたことは、コロナによって子供たちが農業に触れる機会が潰れてしまい、なおさら農業に関心を持たなくなってしまうのではないかという不安です。幼い頃に行った「芋掘り」や「イチゴ狩り」など農業に触れることによる喜びや感動を忘れてしまっていた私ですが、今回の農作業を通して改めて大変さと同時に、仲間と行う楽しさに気づくことができました。ここで得た経験を農業に触れる機会が減ってしまった子供たちを中心に、若者に農業に興味を持ってもらえるようにもっと工夫を凝らすべきだと学ばせていただきました。

作業工程



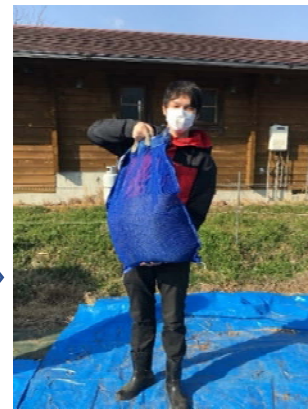
1.束を叩き、そばの実を落とす



2.落としたそばの実を唐箕に入れる



3.ハンドルを回し、そばの実を抽出する



4. 収穫したそばの実

②木綿の植え替え準備

私が次に行った作業は、河内木綿の植え替え準備です。中川内地域には、先程そばの話にもあったように大和川の付け替え工事によって河内木綿の栽培に適した砂地が多くありました。河内木綿は元々1つのブランドとしてその名が全国的に知られていましたが、明治時代に入って外国から繊維の長い綿や細い糸が安価でたくさん輸入されるようになりました。さらに、河内木綿は外国の綿と比較して繊維が短く、糸が太いため機械で紡ぐことに適して

いませんでした。染料も化学染料の使用が始まり藍などの植物染料で染めたものは少なくいなくなりました。手で紡いだ糸を植物染料で染め、手で織った「河内木綿」は木綿の布団としてしばらく残っていましたが、そうした習慣も次第になくなっていき、戦前までに姿を消したとされています。しかし、八尾市周辺ではまだ「河内木綿」を小規模でありながらも栽培しており、実際に河内木綿の木をいただきました。そもそも木綿を教科書や資料集でしか見たことがなく、初めて木綿を見た時はそのまま咲いていることに感動しました。普段あまり服にこだわりを持たないのですが、原料を目にすることで最終的にどのような衣服に織られていくのか作業工程を知てみたくなりました。



作業の様子

今度は、「高安農空間づくり協議会」の河内木綿専門である萩原さんにお話を伺いました。

Q. 河内木綿を栽培し始めたきっかけは何ですか。

A. 地元の木綿(河内木綿)を使って自分だけの服を作りたいからです。服は市場に数多く出回っているが自分には合わず、また費用を要するため、生地からこだわって自分で織って唯一無二の服を作っていたそうです。

また、木綿の良さをもっと若者に知ってもらいたいという切実な思いも打ち明けてくれました。私も「河内木綿」という存在を全く存じておらず、河内で栽培できる木綿だと勝手に解釈をしていました。しかし、私が想像していたほど浅はかなものではなく、むしろ江戸時代では全国的に名を馳せていたことに衝撃を受けました。やはり、時代の経過と共に生地ではなくブランドにこだわる人が増えることによって、木綿に意識が向く人が減ってきているのではないかと思いました。さらにコロナの影響で巣ごもり需要が高まり、以前と比べてますます通販サイトが利用され、生地に触れる機会が減ってくるのではないかと懸念しています。このご時世だからこそオンラインを上手く活かし、綿の魅力をどのように発信していくのか考えていく必要があると感じました。



河内木綿

●農業体験を通して感じたこと

今回そばの実収穫と木綿の植え替え準備を行い、改めて農業の大変さと楽しさを発見できた実りある時間を過ごせました。特に、そばの実を収穫することは非常に貴重な体験であ

り、普段当たり前に食べている蕎麦が農家の手作業によって作られていることに愛を感じました。機械化が進む中で、あえて手作業で収穫することで食べたときの達成感や満足感は極上であり、農業の魅力や良さを今後も発信していければと思います。

今や「農業離れ」だけではなく、日本の「野菜不足」も大きな課題です。野菜が好きであるにもかかわらず、野菜が摂取できない主な理由として「調理が面倒」だと挙げられています。私が特に着目したい箇所は、「野菜が好きであるにもかかわらず」の部分です。つまり、野菜の摂取不足の理由としては「野菜が嫌い」というわけではないことです。野菜に関心があることは事実であるため、このことを活かしてどのように農業に対する固定観念を払拭できるか我々の課題でもあります。

最後に、このような貴重な機会を設けてくださりありがとうございました。農業に対する知識をさらに深め、農業離れを解消していけるように努めてまいります。

ライター名：Zero

「アグリキャンパスプロジェクト：大学生が大阪の農空間の魅力を発信するプロジェクト」



近畿大学

KINDAI UNIVERSITY

【 経営学部 松本研究室 】

Instagram



Twitter



Facebook



YouTube



大阪府

Osaka Prefectural Government

【大阪農空間プラットフォーム】

Instagram



Facebook



HP

